

俺は、この夢を見ると、
巻き戻される。

とろろ芋

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

1ヶ月の最後の日に見る、ある夢を見ると、1ヶ月前に戻るといふ不思議な夢だ。

主人公、「河石 広夢」は、この夢を3回見た。しかし、3回目で突然どこかで見たことのある女の子が、何故か家にいた。

この女の子は誰なのか、どうして家にいたのか、数々の疑問点があるが、ストーリーを見ていくと、段々分かってくる。

一応、ラブストーリーに進む方針です。

目次

第1話

—

1

第2話

—

5

第1話

「また、繰り返される。私のせいで、ごめんね。」

見知らぬ女の子が泣いている。この夢はとても不思議な夢だ。

「またか。」

俺は、大学2年生で「河石 広夢」という。あの夢を見ると、1ヶ月前に戻るといふ、謎の夢だ。

そんな訳で、本当ならば7月くらいだと思う。

今月で、3回この夢を見た。そして、今は4月1日だ。カレンダーを見なくたってもう分かる。

始業式を3回も一年で受けるか？

「さて、始めますか。3回目の4月1日を。」

気合いを入れて行かなければ、やってられん。

テレビを付けても、同じ番組しかやってない。

ふと、時計を見ると、6時25分だ。

「久しぶりに、8:00に出れるな。」

2回目、夢を見たとき学校に行かなかった。そしたら夢を見なくなると思ったからだ。

「だけど、意味ないようだ。」

着替えて朝飯を作るか、と思つた時キッチンの方から、「カチャツ」という音がした。

「あれ、誰だ？誰か居るのか？」

1ヶ月前はこんななかつたのに、と思つているとどこかで聞いたことがある声が聞こえた。

「あつ、だめ！静かにしなくちゃバレちゃう。」

声からして知り合いではない。じゃあ、誰だ？

壁に隠れて、きいていると、また何かを話した。

「・のために、ここに居るあの人に手伝つて貰わないと。」

最初の方が聞こえなかったが、俺が必要なのか？

勇気を出して、聞いてみることにした。

「誰だ？君は。」

「!？」

そこには、どこかで見たことのある女の子がいた。

女の子は、こつちを見たままどうしようかと、迷っていた。

「えつと、あの、その、あつ、ドロボーじゃないですよ。」

かなり怯えていた。しかし、その姿をどこかで見たことがあつた。

「怯えなくていい、君を通報したりはしない。だから答えてくれ、君は誰だ？」

女の子は、今にも泣きそうな声で答えた。

「えつと、うう。」

ついには、少し泣いている。何がいやなんだろうか？

「んくじゃ、名前は？何でここにいるの？」

もう少し簡単な事を聞いていこう。

「・音石 南、です。」

震えた声で答えた。それにしても、聞いたことのある声だと思いがどこで聞いたのか

分からないんだ

すると、女の子が急に立った。

「ど、どうした？急に立ち上がった」

女の子の身長は思った以上高かつた。俺より、少し低いくらいだった。

女の子は時計を確認すると、こつちを向いて、言う。

「学校は？」

「あ、」

時間とは、すぐに過ぎ去るものである、いつの間にか7：30分だった。

「えっと、君は学校とかないの？」

気になって聞いてみると、

「うん、あるよ。だって君があるんだから。」

「あと、「君」じゃなくて「南」って呼んで。」

「あつ、はい。じゃ、俺の事も広夢って呼んで。」

「広夢ね、わかったよ。広夢♪」

はあく、南について謎はとてつもなくて多いが、今は一先ず置いておこう。

第2話

「さて、まずは南に聞きたい事がある。」

「いいよ、何？」

「学校は、どこにあるんだ？」

「そして、何歳だ？」

「学校は、広夢と同じだけど、アンタ女子に年齢聞くのってどうなの？」

「は？ いやいやいや、待て！ 学校が俺と同じ!? どう言うことだ？」

色々急過ぎて分からなくなっている。俺と同じ学校ということは、同じ年ってことだな。

は？ ワケわからん、頭が痛い。

「どうしつたって、こうしたって、同じ学校なんだもの。しょうがないよ。」

「ま、まずうちに女子高生の制服はないぞ！」

「知ってるよ、そんなこと。あつたら気持ち悪いし。」

「じゃあ、何着ていくんだよ！」

「まあまあ、落ち着けて、ね？」

「落ち着けるかつ！」

朝から疲れた、何なんだコイツ。謎過ぎる。

「まあ、何とかなるっしょ。」

「なる訳ないだろ！」

「まあ、広夢の中学生の時の制服とか、あるでしょ？」

「あるけど、男の制服だぞ？」

「大丈夫、貸してくれる？」

「わかったよ。ちよつと待ってて。」

タンスの下にある、白い箱を取り出した。

「確か、この中だったような？」

「！あつたぞ、南」

「どれどれ、ふくん。まあ、いいか。」

そう言うのと南は目の前で着替え始めた。

「ちよつと！南さん!?!俺、男の子だよ！」

「ん？あつ！」

上半身下着姿でやつときずいた。

「こつち、みないで」

また、泣きそうな声で叫んだ。

「す、すいませんでした!」

5分後、扉が開くと、そこにはYシャツ姿の南がいた。

「ど、どう?」

「どうって聞かれても、あと寒くないの?」

「結構、寒い。」

「だろ、じゃあ、これ着てろ。」

俺が、高1の頃着てた薄茶のコートを南に着せた。

「暖かい。ありがと広夢。」

南が温かい笑顔をくれた。さて、面倒なのはこの後だ。そう、「始業式」だ。

高校生活2年目の初めに、新しい転校生が来たとしたら、クラス中えらいことになる。

ましては、南と一緒に学校に行く所を友達に見られたら、精神的にアウト+帰りも見られたらつてあれ、南ってどこに 住んでいるの? 南ってどこに住んでいるの? 南ってどこに住んでいるの? 南ってどこに住んでいるの?

「なあ、南。お前、どこに住んでいるの?」

「どこって、どこだよ。」

「どこだよ。」という言葉が頭の中で反響している。

「な、何を言っているんだ？」

ビックリ衝動が強すぎて、理解出来ず、声が震えている。

「ここは、俺の家だからな！俺、男だからな！あと、自分の家くらいあるだろ、普通。」
何とか、精神を落ち着かせて聞いてみた。

「ううん、無いよ。私の家は。」

「で、でも実家とかは？」

「無いって、身内もない。帰る場所が無いんだ。」

少し、暗い表情で話している南。そして、話が急過ぎて頭が混乱している、俺。

「だから、ここに住ませてくれない？お願い、広夢。」

困った表情で南はこっちにお願いをする。

「はあく、全く困った奴をほっとけないのも罪か？まあ、いいよ。」

「ほんと？」

「ああ、本当だ。」

南が、嬉しそうにしているから、少しおちよつくってやろう。

「だが、俺は男だ。いつ南を襲うか分からないぞ？」

「ふくん、別にいいよ。その勇気があるならね。」

「なっ、南！一応、女なんだからそう言う事を堂々と言うな！」
少し、恥ずかしいんだこのセリフ。予想外の反応に少し、ドキツとしてしまった。
はあ、厄介なのがやってきたな。